

## 五箇山上平地区 の交通事情と買い物

著者	阿部 圭佑
雑誌名	金沢大学文化人類学研究室調査実習報告書
巻	36
ページ	77-86
発行年	2021-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.24517/00064086">http://doi.org/10.24517/00064086</a>



## 7. 五箇山上平地区の交通事情と買い物

阿部 圭佑

- |            |         |
|------------|---------|
| 1. はじめに    | 4. 考察   |
| 2. 交通について  | 5. 終わりに |
| 3. 買い物について |         |

### 1. はじめに

今回行った南砺市五箇山上平地区の調査の中では、上平地区に住む人々から今や昔の暮らしぶり、文化や産業についてたくさんのお話を聞くことができた。その中で、人が住んでいるにも関わらず、上平地区の中に極端に買い物できる場所が少なく、住人の方々も大変そうだと感じたのが印象に残っている。また、買い物について調べていくうえで、上平地区の交通事情にも深く関わってくる事柄であるのだと感じた。

最初に、調査を行った五箇山上平地区の人口についてまとめる。南砺市ウェブサイトの統計より、令和2（2020）年10月末時点で旧上平村、現在の南砺市上平地区に居住する人々は合計で624人である。そのうち65歳以上の高齢者は258人にも上り、高齢化率は41%である。また、その人口構成より、今後さらに高齢化が加速していくものと見られ、高齢者が半数を超える、いわゆる「限界集落」になる日が近づいてきている。加えて、昭和5（1930）年のピーク時と比べると人口自体も激減している。

本章では、高齢化・過疎化がどのように上平地区の買い物事情に影響を及ぼしているのかについて、考えていく。またその過程で、上平地区の交通の変遷についてもまとめ、その変化がどのように買い物事情に影響を及ぼし合っているのかも考察していく。加えて、現在の買い物や交通事情についても聞き取りを行い、問題点を考えたうえで、今度どうしていったらいいかという見通しを立てることを目標とする。

### 2. 交通について

上平地区の交通事情について、その変遷をまとめていく。

#### 2.1 道路事情

上平村ができた明治23（1890）年ごろの村内の道路は江戸時代のころのそれと大差はなく、外部との往来はおろか集落と集落との間でも牛の通行でさえ困難であった箇所が多かったという。庄川を渡る橋も村内に2か所しかなく、それ以外の場所では「籠の渡し」と呼ばれる、空中に鋼索を張った簡易的なロープウェイのようなもので行き来していた。明治23（1890）年に平野部の城端と上平村の入り口にあたる下梨との間に新しい道が作られ、その後上平村南部にあたる西赤尾まで延長された。この道路は昭和29

(1954)年に国道156号線に昇格され、昭和39(1964)年ごろから舗装工事が開始され、一気に近代化が進んだ。昭和54(1979)年秋にこの156号線は全線開通し、平野部方面との往来が大幅に改善された。東回りだった156号線に対し、より城端方面と直線的に往来可能としたのが、旧五箇山街道を整備し昇格させた国道304号線であり、交通の難所であ



図1 五箇山周辺の道路 (Google マップより)

った狭くて急峻な部分にトンネルを通し、総事業費59億7000万円(当時)と5年の歳月をかけて、昭和59(1984)年3月に五箇山トンネル(3070m)を含む全長3350mのバイパス道路が開通した。この道路は冬季でも途絶することが少なく、さらに村内の交通は改善された(『日本の道100選』研究会2002)。その後平成12(2000)年9月に東海北陸自動車道の五箇山～福光間が開通し、村内と村外を行き来する交通網はより強固なものになった。村内の移動についても時代を追うごとに道路が整備され、また橋も多くかけられたことにより改善された(上平村役場1982)。

## 2.2 交通の変遷について

昭和24(1949)年時点で上平村内にある自動車はトラック2台のみであった。その後、自家用車やトラック、原付などが増えていった。時を同じくして村内を通る自動車の量も増え、交通事故への対策なども進んだ。古くは、冬季において上平村から城端方面へ出る方法は、以前は峠を2つ越える徒歩の方法しかなく、この道の所要時間はおおよそ4時間であった。また、荷物を担いでいたり、道が悪かったりするとその所要時間はもっと伸びることとなった。悪天候の際は通ることができず、長い時には1週間以上もの間交通が寸断された。それが昭和5(1930)年になると庄川を経由した電力会社の船が運行されるようになり、これを利用するものが増えてきた。昭和46(1971)年に村営バスの運行が始まり、また同時期に開通した前述の道路の除雪とともに、冬季でも安定して村外と行き来が可能になり、峠を徒歩で越えるものは全くなかった。昭和53(1978)年に加越能バスが運行を開始すると、村営のバスは廃止された。この加越能バスは現在「世界遺産バス」として、高岡方面～城端～五箇山～白川郷を結ぶバスを運行している。その他にも、北鉄バス・濃飛バスが高速バス(金沢～五箇山～白川郷～高山)を、イルカ交通が「きときとライナー」(高岡～城端～五箇山～名古屋)を運行している。五箇山の地区内に鉄道は存在しないので、公共交通機関を利用してどこかへ行こうとする場合には、これらのバスを利用する必要がある(上平村役場1982)。

## 2.3 交通と住人の暮らしについて

先に述べたように、上平地区で公共交通機関を利用する場合、バスが唯一の選択肢となる。しかしこのバスは上平地区内を通してはいるものの、主に地区外と地区内とを結ぶことに重点が置かれており、国道沿いにしかバス停がない。それぞれの集落ごとにバス停はあるが、集落の奥の方に住んでいる人にとっては若干利用しにくい面がある。ここからはそのような交通事情について、聞き取りを中心にまとめていく。

### A さん（男性、42 歳、菅沼）

基本的には、村内では車を持っていないけれども不便である。世界遺産バスなどのバスもあるが、地元の人ほとんど利用していないのではないだろうか。自身は週 1 日くらい車を使って五箇山の外へ出ている。車さえあれば道路の整備はきちんとされているし、不便はないのではないだろうか。高齢者もかなりの人数が運転している。一方で、免許を自主返納している人もいる。そういった人たちにとっては、不便で仕方ないだろうし、実際苦労している人がいるというのも聞く。五箇山トンネルが開通した後は、五箇山の地区内に住みつつ金沢方面へ通勤している人もいる。道路網の整備は、村に住みながら町の方へ通勤することを可能とし、ある意味五箇山から出ていく人を引き留めた要因ともいえるかもしれない。高速道路の開通は、五箇山トンネルの開通以上に便利になったと感じた。気軽に街の方に出られるようになった。一方で、道路が便利になればなるほど、村の中のお店などが減っていったので、寂しいと思いつつそれは仕方のないことなのかもしれないと思った。今後どうなるかわからないが、道路事情についてはいまの状況を維持しておいてもらえれば不満はない。

### T さん（男性、93 歳、東赤尾）

90 歳で免許を自主返納し、現在車は運転していない。基本的にあまり家から出ることはないが、何かの用事で外出しなければいけない場合、近所に車を出してくれる人がいるので、その人のお言葉に甘えている。五箇山の中だとそういった人は割といるので、まったく移動できないといったことはあまりないのではないだろうか。しかし、毎回お世話になっているので、ありがたいことだと思いつつ若干申し訳なく思っている。送ってくれた人に対してお金を差上げると法に触れてしまうので、そのあたりどうにかならないだろうか毎回感じている。今の時代に限ったことではないが、冬場の豪雪には特に注意が必要で、外に出られなくなったらどうしようとおびえている。五箇山トンネルができた後もあまりにも雪がひどいと外との往来ができなくなることもあった。その点高速道路は通行止めになることはほとんどなく、助かっている。自身が病気を患った際、城端の病院に通うことがあったのだが、そこまでの往復は煩わしかった。世界遺産バスなどのバスを使うこともできたが、バス停までも結構な距離があり、使わなかった。道路網の発達で外との往来のしやすさは天と地ほどの差でしやすくなった。しかし、昔は何でも村の中で済んでいた



が、今は外に行かなくてはならないこともあり、しかもそこまでの交通手段が貧弱で、その点では煩わしさが増えたともいえるのではないか。免許を返納したことについては、車を維持しなくてよいので年 20 万円ほど浮くし、自分が運転することともなくなり事故を起こす危険性がなくなったという点において、後悔はしていない。人口がどんどん減っていつている五箇山において、外との行き来がしやすくなったことで外の魅力に気付いた若者が流出し、将来的に五箇山での生活が成り立たなくなるのではないか、ということを心配している。

以上 2 名の聞き取りをもとにまとめると、上平地区の現在の交通の特性として①世界遺産バスなどのバス類は地元の人にはあまり利用されておらず、主に観光客や長距離客向けである。②村内を移動する際は自動車。免許を返納した場合でも近所の人同士で助け合い乗せ合う。③車さえ持っていれば冬季でも交通が途絶することはほとんどなく、特に不便さは感じない。以上の 3 点にまとめることができよう。

#### 2.4 コミュニティバスについて

調査の過程で、「合併前の上平村において、コミュニティバスが運行されていた」という情報を得た。その点について、南砺市役所上平市民センターに問い合わせた結果を述べる。合併前の上平村においては、コミュニティバスといった位置づけではないが、細島にあるくろば温泉行きのバスが月 2 回、老人クラブの活動用バスが随時、上平村直接の運行によって走っていたようである。いずれも高齢者の活動をフォローする目的で運行されていた。合併時点で老人クラブの活動用バスは廃止され、くろば温泉行きのバスはしばらく存続していた。しかし、2020 年度に組織改編が行われ、その際に廃止になったようである。合併による市民への細かいサービスの削減の例であるといえよう。

### 3. 買い物について

この節では、住人の皆さんに行った聞き取りや、村史などをもとに、上平地区における買い物の方法の変遷と、現在の買い物事情についてまとめていく。

#### 3.1 買い物・過疎部の買い物について

ここでは、買物弱者・過疎部の買い物について、現状どのようなものとなっているのかを、経済産業省の報告をもとにまとめていく。

住んでいる地域で日常の買い物をしたり、生活に必要なサービスを受けたりするのに困難を感じる人たちのことを、「買物弱者」と呼ぶ。生鮮食料品店までの距離が 500m 以上かつ自動車を持たない人達が買物困難者として定義されている。報告書が書かれた時点で全国に約 700 万人いると推計されていて、特に農村・山間部では、アクセス可能な店舗が存在しないことによる買い物難民の増加が指摘されている。採算が取れず、少子高齢化・過疎化により後継者がいないことで小売店の撤退がより早期から問題化していることが指摘されている。人口減少のスピードが高齢化率を上回るので高齢者人口自体

は縮小していくが、過疎化が続くので農村・山間部における買物難民問題は継続する。山間部における買物弱者問題は、低栄養や生きがいの喪失、孤独死の増加、緊急時の物資供給の難化や、商店が担っていた防犯機能や情報発信機能の低下、それに伴う治安の悪化や住民の情報取得機会の減少などの問題を引き起こす可能性をもはらんでいる。対策としては宅配や買い物代行、移動販売や買物場の開設、移動手段の提供や会食といった方法がある（経済産業省 2014：6-51）。

五箇山も例に漏れず、山間部における買物弱者問題が顕在化するような場所である。調査を進めていくうちにここで挙げたいいわゆる「買い物難民」になりうるような人々がいる一方、その対策となっているような事例も見受けられた。ここからは、五箇山の買い物について、その変遷をたどりながら見ていく。

### 3.2 昔の買い物について

昔の買い物についてまとめていく。上平地区における商店の始まりは、明治 12(1879)年ごろに住人から出された「酒類受売営業鑑札」などにみることができる。酒類を受売する免許を手に入れた住人たちは、その後村内に酒屋や煙草屋、雑貨屋や呉服店などを開業させていったようである。戦前までは必要最低限のものを売る店しかなかったが、戦後になると観光客の増加に伴い、食堂やドライブイン、喫茶店などが増加した。しかしその後、村内の高齢化と過疎化に伴い、徐々にその数を減らしていったようである（上平村役場 1982）。

ここからは、聞き取り映像資料を参考にまとめていく。

**S さん（女性、83 歳、猪谷）、Y さん（女性、78 歳、皆葎）、A さん（女性、85 歳、猪谷）、N さん（女性、73 歳、猪谷）、M さん（女性、86 歳、猪谷）**

私たちが子供の時（おそらく 1950 年代か）には、在所ごとに酒や塩、醤油などの調味料を売る店があった。それ以外の野菜などは基本的に自給自足だった。また、それ以外にも駄菓子屋なども上平の地域内にあった。上平地区の交通事情が改善されるまで平野の方に出るのは大変なことであったため、基本的には上平の地域内で買い物を済ませていた。加えて、大きな風呂敷を担いだ行商人のような人がやってきて、ものを売っていたこともあった。しかし、あまり利用したことはなかった<sup>1</sup>。

**T さん（女性、82 歳、梨谷）、K さん（女性、84 歳、梨谷）**

当時冬の間は豪雪により往来が危険なものとなるので、平野の方に出ていく場合は年が明けて早くても春先になるまで待つのが普通だった。私たちが少し大きくなってからは、一人でおつかいを任されることもあった。海で捕れるイワシのおつかいを頼まれた記憶がある<sup>2</sup>。

---

<sup>1</sup> 聞き取り映像資料 2020 年 7 月 11 日聞き取り、S さん（女性、83 歳、猪谷）、Y さん（女性、78 歳、皆葎）、A さん（女性、85 歳、猪谷）、N さん（女性、73 歳、猪谷）、M さん（女性、86 歳、猪谷）より

<sup>2</sup> 聞き取り映像資料 2020 年 6 月 21 日聞き取り、T さん（女性、82 歳、梨谷）、K さん（女性、84 歳、梨谷）より

次に、筆者が行った聞き取りをもとにまとめる。

#### T さん（男性、93 歳、東赤尾）

まず食べ物に関しては、昭和 36（1961）年に上平に農協ができるまでは村内ではあまりいいものを買うことはできず、また買うことも自給が難しかったもの以外はあまりなかった。しかし、食べ物が少なく餓死した人が出た、という話はほとんど聞くことはなく、食料を買えずに重大な事態に陥るということは少なかった。昭和 36（1961）年に上平に農協ができてからは、村内部における稲作・畑作が改善すると同時に外部からも様々な種類の新鮮な農産物が入ってくるようになり、村内における栄養状態の改善に一役買っていた。肉・魚に関しては、魚屋があったが、肉屋単体というものはなく、魚屋で扱っていた。しかし、常に置いてあるわけではなく、仕入れがあったときのみ買うことができていた。戦後、1960 年～70 年ごろは今より人が多く村の中も活発で、多くの食料品店や日用品店、喫茶店などもあった。しかしその後、人口が減るにつれ、また道路の状況が良くなるにつれ外で買い物をする人が多くなっていき、それにつれて村の中で買い物することも少なくなり、次第にお店の数は減っていった。

まとめると、①上平地区では戦後になってから商店などが増加し、それまでは必要最低限のものを売る店しかなかった。②上平地区で買えないものは城端などの平野部に行って買っていて、道路網が改善されるまでは大変な道のりであった。③1960～70 年代が村内における商店の最盛期で、様々な種類のお店があった。④上平地区の過疎化と高齢化に伴い、お店の数はどんどん減っていった。この 4 点になる。

### 3.3 今の買い物について

上平地区の今の買い物事情について、まとめていく。

#### ・商店について

現在上平地区において、食料品や日用品を扱うスーパーは「みなくち」という店舗ただ一軒のみである（食事処やお土産店、道の駅などは有り）。いくつかの集落が存在している上平地区においては、集落間の移動が困難な人にとっては「みなくち」に行くことができず、その他の方法で買い物を行っている。その他コンビニのような食料品・日用品全般を扱う店舗は存在しない。

#### ・移動販売車について

現在上平地区においては、農協の移動販売車と「とくし丸」が運行する移動販売車とが村内を巡回している。前者は A コープ南砺セフレ店と、後者はヴァローレ砺波店と業務提携をし、生鮮品や日用品などを積んで各地を巡回している。農協は火曜日と木



図2 みなくち（2020 年 12 月 14 日、筆者撮影）

曜日に上平地区を巡回し、とくし丸は月曜・木曜、火曜・金曜、水曜・土曜に上平地区の決まったコースを巡回している。巡回のコースは要望に合わせて変化しており、それぞれ農協ととくし丸に問い合わせをすることで、指定した地点のすぐそばまで来てもらうことができ、移動することなく買い物をすることが可能である。品ぞろえについても、農協は350点、とくし丸は400点ほ



図3 小原でのAコープの移動販売車の様子  
(2020年10月13日、田村撮影)

どを載せており、商品のリクエストにも可能な限り応えている。農協については、かつて五箇山地区の中に最大5店舗あったAコープ（現在では0店舗）の後継的な位置づけとなっており、商品配送サービスなどではできない「手に取って商品を選ぶ」という形態を重視している。とくし丸については、そのコンセプトとして「おばあちゃんのコンシェルジュ」というものを掲げており、週2回の訪問で直接顔を合わせて買い物をする関係だからこそ、その親しい関係を築きつつ可能な限りお客さんの要望を聞く、ということを実践に掲げ運行しているようである。両者とも毎曜日決まったルートで運行しているので、いわゆる「地域の見守り隊」のような役目も果たしており、いつも買い物に来るお客さんが来ないときなどに、その異常を早期に発見できるような役目も担っている。単に移動販売車で商品を提供するだけでなく、様々な役割を上平地区の移動販売車は担っている。

ここからは聞き取りをもとにまとめていく。

#### Aさん（男性、42歳、菅沼）

買い物に関しては、生鮮品以外はネットで買うのがほとんどである。生鮮品などのネット通販が向かないものについては、週1〜2回ほど、平野部のスーパーへ行って仕入れている。みなくちは売っているものが限られていて品数も少ないのでほとんど行かない。移動販売車も同様で、1回しか利用したことがない。ただ、自由に平野の方へ下りていけない高齢者の人にとっては、移動販売車はとてありがたいものだと思うし、実際多くの人が利用しているのではないだろうか。ネット通販もあるし平野に出て買い物もできるので、特段不便さは感じていない。コンビニなど、あったら便利だろうとは思っている。実際何度もコンビニを作る計画が持ち上がっていたが、実現には至っていない。しかし、そのような店がない方が五箇山に残っている店舗の存続にはいいのではないと思う。今後さらに人口が減り高齢者が増えると思う。それに伴い、みなくちや移動販売車がなくなってしまう日もいつかは来るだろう。そうなったとき、自力で移動できずネット通販も利用できない人はどうするのか、そう考えると少し怖いところがある。今後の時代の流れによっては高齢者もどんどんネット通販を利用するような世の中になってくるのだろうか。そんな

ればいずれ移動販売はなくなってしまうかもしれないが、致し方ないことだろう。

**T さん（男性、93 歳、東赤尾）**

日用品や生鮮品などは農協の移動販売車で買っている。90 歳で免許を返納するまでは、自動車を使って平野の方に下りて行って買い物をすることもあったが、今では近くまで来てくれる移動販売車に頼っている。移動販売車はお願いをすれば品ぞろえにないものも持ってきてくれるので、「これを買えなくて困る」ということはほとんどない。どうしても足りなくなったものは近所の人をお願いして買ってきてもらうか、車に乗せてもらって一緒に買い物に行くこともある。買い物に関して、不自由に思っていることはない。移動販売車が来てくれるおかげで、昔より今の方が便利なのではないかと思うまでになっている。今では移動販売車の方ともすっかり顔なじみになって、会うのが楽しみだ。今後どんどん人口が減っていくうえで、いつとくし丸や農協の移動販売車がなくなるのかと思うと、今からとても不安である。私のような人はほかにもたくさんいると思うので、どうにかして移動販売車は存続させてほしい。

まとめると、①車を運転できる人は平野の方に下りて行って買い物をする。②車を運転できない人は、移動販売車が生活に必須になっていて、お客さんとの間に信頼関係が築かれている。③みなくちはその特性上、近くに住む人が車を運転できる人しか利用できず、遠くから歩いていくことに適していないのではないかと。この 3 点になってくるのではないかと。

#### **4. 考察**

ここからは、今まで見てきた聞き取りや参考資料をもとに上平地区の交通や買い物について何が問題なのか、またどうすればその問題を解決できるかを考えていこうと思う。

##### **4.1 交通における問題**

現代の上平地区においては、1 つの大きな問題を抱えているといえよう。「公共交通機関の貧弱さ」である。道路網については、昔に比べると見違えるほどに改善されたようであるが、公共交通機関は前述したようにかなり貧弱なものがある。少子高齢化・過疎化が進む五箇山においては公共交通機関の維持が困難であり、そのような事態になってしまうのも致し方ないように感じる。反面車があればそれほど生活に苦勞することはないようである。しかしながら、免許を返納した高齢者や、何らかの事情で車を運転できない人にとっては隣人などに頼るほかなく、それができない人にとっては上平地区の交通事情は苦しいものがあるといえよう。また、隣人に頼って車に同乗させてもらう場合でも、前述したような法の壁があり、金銭などを介したお礼が簡単にはできない、という問題点もある。加えて、今後の人口減少を見据えればこれらの問題はより深刻になっていくことは明白であり、早期の対策が求められるといえる。



## 4.2 買い物における問題

現代の五箇山においては、買い物に関してはあまり苦労している印象は見られなかったが、それでも聞き取りを進めていくうちに、問題点が見えてきた。1つ目に、移動販売車では取り扱っておらず、またお願いして持ってきてもらうこともできないようなものを買うことが大変な人たちがいる、という点である。そのようなものを



図 4 みなくちと半径 500m 圏内 (Google マップより)

買う場合、車を自分で運転できない人たちは、誰かにお願いして乗せてもらって買い物に行くことになる。それができず、さらにはネット通販なども利用することができない場合、その品物を手に入れることが困難である。例を挙げると家電や家具など大型の品物になるだろうか。しかし、これらの品物は頻繁に必要なものではなく、それほど頻度でなければほかの人にお願ひして買ってきてもらうなど、柔軟な対応ができるであろう。このような点を考えた時、移動販売車を軸にした現在の買い物体系は適しているといえる。2つ目に、今後の人口減少に伴う買い物機会の喪失である。昔に比べると大幅に商店が減少した上平地区では、住んでいる場所の半径 500m 以内に商店が存在していないケースが多く、移動販売車によって買い物の機会を確保している。今後の過疎化でそれらのサービスが廃止された場合に備えて、今から対策していくことが必要であるといえよう。

## 4.3 解決策の提案

ここからは、解決策を提案していく。交通面・買い物面両方において問題となっているのが「自動車が運転できないことによる弊害」の存在である。五箇山においては先にも述べた通り、自動車があれば比較的容易に平野部と行き来することができ、また村内での移動も苦ではない。また、買い物についても自動車で移動することができれば苦労することは少ない。自動車が運転できない人にとっては、この五箇山の車社会の現状に苦しめられることになる。このことを解決するために、上平地区において先に述べた「自家用有償旅客運送」の導入を私は提案する。いわゆる白ナンバーでも有償の旅客運送ができるこの自家用有償旅客運送は、廃止された公共交通機関の代替として利用するためにその法的枠組みが整備された。この制度を利用して、車を運転できる人が運転できない知人を気軽に乗せることができるようなサービスを提供してみてもはどうだろうか。五箇山の中においては、その限られた人口から見知った顔が多く、その人たちに有償で車に乗せてもらうことで、交通・買い物両面の問題を解決できるのではないかと考える。

## 5. 終わりに

今回の実習では上平地区に泊まらせていただきながら聞き取り等を行い、またその自然の豊かさや風土など、上平地区の雰囲気を体験させていただいた。やはり時代の流れには逆らえずに過疎化・高齢化が進んでいるが、独自の文化などの個性を持った上平地区はとてもいい場所だと感じた。住人の方々も優しく丁寧に上平について教えてください、とても助かった。今後さらに人口が減っていくと予想される上平地区において、それでも住人の方々の生活の様子はどことなく前向きで、印象的であった。一つの場所に長い期間関わる機会はないので、今回の実習はよい経験であった。今年度の実習は短期間であり、情報を仕入れるのに少し苦労したが、ある程度形にできたことがうれしい。情報をくださった上平地区の皆さんに感謝申し上げたい。